垂水史談会報

第 58 号
2024（令和6）年
8月発行

【報告】

垂水史談会復活３０年記念

『戦争のあったころのことを知ろう』

―戦争体験を聞く会―

令和６年８月４日　垂水市民館

８月５日の垂水空襲の日によせて、久しぶりに戦争体験を聞く会を開催することができました。

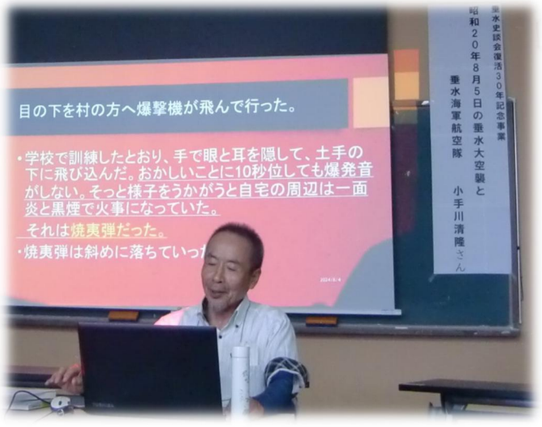
瀬角事務局長の開会のあいさつの後、鹿屋市戦跡ガイドの小手川清隆さんによる報告発表『昭和２０年８月５日の垂水空襲と垂水海軍航空隊』。

８月５日の空襲で垂水市街地は８割以上焼失するという大変な被害を受けました。以前から、「なぜ、垂水がこんなに徹底的に破壊されたのだろう？」と疑問を持っていました。今回、小手川さんの報告で、「米軍は、垂水に当時ジェット機の生産場所だと誤認していた」（工藤洋三氏が米軍公文書の調査による）という事実を知り、「そうだったのかあ。」と納得すると同時に、「誤認でこんな被害をもたらされたのか！」と憤りも感じました。

後半は、霧島市在住の赤崎雅仁さんに『満州からの引き揚げ』体験を聞かせていただきました。

当時６６０万人といわれる日本人が海外にいたそうです。敗戦後、その人たちの引き揚げは苛酷を極めたと聞きます。当時１０才だった赤崎さんは、旧満州の琿春（こんしゅん）でソ連軍の侵攻により避難生活が始まります。身重の母と弟、二人の幼い妹との避難行。母はおなかに赤ちゃんがいたため、１０才の少年は４才の妹をおぶって１００キロのみちを歩いたそうです。ソ連兵がおそってくることがあるので、歩くのは夜だけ。畑のコーリャンを取って食べたそうです。しかし、冬の寒さと食料不足のため、妹たちは亡くなり、母も結核で失います。１９５３年３月、弟と二人、鹿児島県のおじさんをたより、ようやく日本へ帰ることができたそうです。

苛酷な体験を淡々と語る赤崎さんの姿からその悲しみ無念さが伝わってきました。二度と愚かな戦争を起こしてはいけないという思いを新たにするとともに、現在戦争が行われて国や地域では悲しみや苦しさが再生産されていることへの怒りを新たにしました。

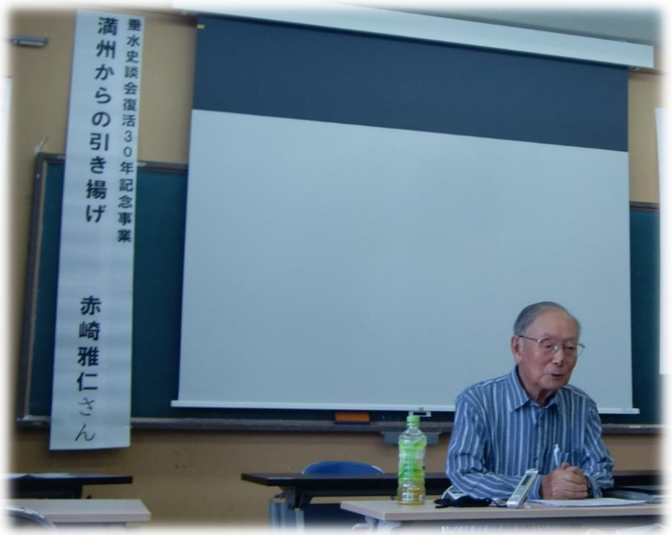


敗戦・被爆７９年を迎え、体験者の数は少なくなっています。しかし、直接耳にし、同じ場で感じないと伝われないものは確かにあります。機会がある限り、今回のような歴史や体験を聞く場を大切にし、平和を願う気持ちを受け継いでいきたいです。

（古場昌彦）

【当日のアンケートより】

「戦後７９年になって、戦争のことで初めて知ることが多いです。いま、沖縄だけではなく鹿児島が軍事基地化されようとし、既にいろんな施設ができてきています。それも国民に問うことなく国会での議論もほとんどなく進められているのに恐さも感じます。戦中戦後の歴史を学ぶことでまた意識を高め、２度と戦争は繰り返してはならない、、、。改めてそう思いました。ありがとうございます。（鹿屋市５１～８０歳）」「戦争について考える、学ぶ機会をなくさないようにしたいです。（垂水市５１～８０歳）」「満州から帰るのはとても大変であったことがわかりました。考えてみると悲しいです。大切な話をありがとうございました。（垂水市１１～２０歳）」「とても良い話でした。チャンスがあればまた参加したい。（垂水市８１歳以上）」「父、硫黄島にて戦死、鹿児島市にて空襲を受け、伊敷方面に逃げましたが、幸い無事であったことを感謝しています。（垂水市８１歳以上）」「実体験をきける機会は中々ないのでとても貴重でした。（垂水市１１～２０歳）」「垂水空襲の経緯がよくわかりました。浜平の特殊地下壕保存の大切さも理解しました。赤崎氏の実体験を淡々と話してくださいました。悲しむ余裕もない状況だったことでしょう。どうか、一日でも長く命をつないでいただき、貴重なお話を若い世代に聞かせていただきたいと思います。ありがとうございました。（垂水５１～８０歳）」「満州の貴重な体験を聞けてとても有意義でした。（垂水市２１～５０歳）」「最初の話は分かりやすかったです。ぼくは小学校５年生ですけど、妹をせおって１００㎞歩いたり、弟と二人で日本に帰ってきてとおくにすんでいるおじさんの家に行くことは不可のうです。（垂水市～１０歳）」「貴重な体験談をお聞かせいただきありがとうございました。体験者でなければ語れない事で、話して下さる意味は非常に大きいです。複雑な心境のお立場でも申し訳なく思いますが、どうかこの活動を続けてほしいです。ありがとうございました。（錦江町５１～８０歳）」「引き続き取り組んで下さい。（垂水市５１～８０歳）」「貴重なお話ありがとうございました。Ｓ１８年生れ主人が引揚げ、幼少期両親は早くに亡くなり、引揚げの様子を聴きに来ました。叔父が４人入隊で２人戦死。私はＳ２１年生、海軍上がりの純毛の２つ折りの毛布、軍服、やかんなど目にしたり使ったりしていたことはありますが、今の世があちこちで戦闘があり心が痛みます。（霧島市５１～８０歳）」「本日は昭和１１年生まれの母と参加



しました。母も小学３年生の時に父（硫黄島で戦死）を亡くし、今も時折、当時のことを話してくれます。赤崎さんのお話を伺い、戦争の悲惨さを再認識し、二度と戦争のない平和な世の中が続くことを祈念します。（垂水市５１～８０歳）「戦後８０年になるというのに今も同じような戦争がウクライナ、ロシアで行われ、赤崎さんのような子供、老人が被害を受けているのはなぜなのでしょう。人間のエゴで領地争い、何百年たっても変わらない独裁者のやめるという決断が出来ないおろか者！！赤崎さん、お父さん、お母さん、妹さん達の分まで元気でいて下さいね。（垂水市５１～８０歳）」「初めて聞く話、初めて見る資料ばかりで大変興味深かったです。ありがとうございました。（垂水市２１～５０歳）」

国指定史跡

垂水島津家墓地を清掃ボランティア

８月１１日

８月１１日（日）、早朝６時から９名の会員により、垂水島津家墓所の清掃ボランティア活動が行われました。

垂水史談会ではこの活動を毎年続けていますが、今回は、四台の草刈り機が活躍し、伸びた雑草を刈ったり草むしりなどの作業を行いました。

「垂水島津家墓所」は、令和２年３月に垂水市で初めて国指定となりましたが、同年７月の大雨により裏山が崩れ、上段の一部墓石が土砂崩落の被害を受けました。

現在、復旧作業中ですが、令和６年８月２４日(土)には、災害復旧発掘調査現地説明会が開催される予定で、すっきりした状態で参加者を迎えることが出来そうです。

（新原清実）

垂水島津家墓所の災害復旧調査速報

垂水市教育委員会では、令和２年度に被災した垂水島津家墓所の災害復旧に努めています。令和６年度は、今後の復旧工程を検討するための発掘調査を実施しています。

今回の発掘調査は、石造物の地下構造と史跡北方の土の重なり方とを調査することが主な目的です。

石造物周囲の調査では、均等に固められたような平坦な土の上に石造物が載せられていました。平成の調査の成果から推察すると、史跡北側のいくつかの石造物については、江戸時代ではなく明治大正以降にこの場所に安置されたのではないかという可能性が出てきました。

石造物の中の土を調査したところ、周囲の土とは全く違う土の層が検出されました。軽石などを均等に混ぜ合わせて平坦に固めたようなこの土の在り方は、この石造物の下に何らかの主体がある可能性があることを示しています。近代になってから別のお寺から埋葬主体ごと移されたのか、空洞の内部に土を充填し石造物を補強することが目的だったのかはわかりませんが、周囲と主体部が全く違う土の層であったという事実は大きな収穫でした。

また、斜面や北東側盛土の土の様相からは、この墓所が何度も土砂流入災害にあっていたことが明確になりました。過去の災害覆土の中からは、ポケットモンスターシリーズのピカチュウのおもちゃも検出されました。これはポケットモンスターシリーズが始まった初期のおもちゃで、１９９８年製であったため、この覆土がこれ以降の時期のものだということがわかりました。

今後は斜面/盛土/石造物周辺のそれぞれの土の関係性について詳しく調べていきます。

今回の発掘調査からは、多くの情報を得たり、確定させたりすることができました。この成果を踏まえて、専門家の方々によるご助言を受けながら、今年度中に災害対策工事等の作戦を立て、迅速な災害復旧に努めてまいります。

今後とも本事業へのご理解のほど、よろしくお願い申し上げます。

（垂水市教育委員会：高嶺光佑）

【図１　石物内部の土】

【図２　土の中からピカチュウがとびだしてきた！】

―たるみず春秋―

子の遺品江戸風鈴を吊るしけり

西野英昭

軒端に吊るした風鈴は、その音色で夏の暑さを和らげる

ところでこの作品の風鈴はガラスで出来た江戸風鈴である。

亡くなった子の遺品の中にあった江戸風鈴を吊るすと、かすかな風にも応えるその音色は子の言葉にも似て、切なく自分に語り掛けてくるようだ。

風鈴に冠せられた「江戸」によって時代の持つ情緒も垣間見せる。

（季語：風鈴・・夏）

（文章：瀬角龍平）